

県立御坊商工高等学校 埋蔵文化財発掘調査概報

— 小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)の調査 —

1987.3

和歌山県教育委員会

序 文

日高平野の一画を占める御坊市は日高郡の経済・文化の中心として古代から重きをなし、旧石器時代から中世にいたる集落・古墳・城館・寺院などの埋蔵文化財が数多く所在しています。

本県教育委員会は県立御坊商工高等学校の校舎増改築に伴う小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）の発掘調査を社団法人 和歌山県文化財研究会へ委託し、第6次調査を実施しました。調査の結果、湯川氏館跡に関連する堀・土塁・溝・井戸・土壤・自然流路を発掘するとともに弥生時代中期の土器・石器をはじめとして内容豊かな多数の遺物が出土しました。特に、湯川氏館跡に関連する造構・遺物が豊富で、館跡の規模・内容をより詳細に検討することが可能となっていました。また、今回発掘しました湯川氏に関係する井戸の一基を破壊せずに保存できたことは望外の喜びかと存じます。

ここに、発掘調査概報にまとめ一般の活用に資したく存じます。

最後に、調査にあたっては御坊市教育委員会、御坊市遺跡調査会、県立御坊商工高等学校をはじめ関係各位のご協力をいただき、ここに記して感謝の意とする次第です。

昭和62年3月14日

和歌山県教育委員会

教育長 中川 昭

例　言

1. 本書は、昭和61年度に実施した県立御坊商工高等学校の校舎増改築に伴う小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、本県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施した。
3. 発掘調査は、県文化財保護審議会委員の指導を受け、県文化財研究会技術員土井孝之を担当とし、同技術員井石好裕・佐伯和也・瀬野耕平がこれを補佐して実施した。
4. 発掘調査にあたり御坊市教育委員会、御坊市遺跡調査会、県立御坊商工高等学校事務局、ならびに地元の方々にご協力を受けた。記して感謝する次第である。
5. 出土遺物の整理及び本書の作成は、県教育委員会文化財課の指導を受け、県文化財研究会土井が担当した。出土遺物の内、陶磁器の一部を北野隆亮、県文化財研究会村田弘、奈良時代の土器の一部を同黒石哲夫氏の手を煩わせた。また、遺構・遺物の整図及びレイアウトは県文化財研究会嘱託藤田由香螺の協力を得た。尚、本書の図面と図版の遺物番号は一致する。
6. 調査委員会の組織は下記のとおりである。

調査委員

福磨 正信（和歌山県文化財保護審議会委員）

巽 三郎（タクミサムライ）

都出比呂志（タケミヒロシ・大阪大学文学部教授）

藤澤 一夫（タケル・タクミサムライ）

事務局

常務理事 梅村善行（県文化財課長）

調査員 土井孝之（県文化財研究会技術員）

次 長 宮崎喜一（県文化財課主幹）

◆ 井石好裕（タクミカツヒラ）

◆ 桃野真晃（県文化財課長補佐）

◆ 佐伯和也（タクミワカ）

幹 事 吉田宣夫（県文化財課第二係長）

◆ 瀬野耕平（タクミカツヒラ）

書 記 坂本英雄（県文化財課第二係主事）

目　次

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 発掘調査の経過	1
3. 発掘調査の位置と方法	2
4. 各地区的調査	2
5. まとめ	6

1. 遺跡の位置と環境（図面一・図版一）

小松原Ⅱ遺跡（24）は、日高川の流れによって形成された河口部北岸の旧自然堤防上に立地する。本来、日高川は日高平野が一望できる亀山南端に沿って流れ、時代と共に南へと流路を変化させている。その過程において、現在の国鉄紀勢本線御坊駅南側に弓形の自然堤防の基盤を形成している。

湯川氏館跡（25）は、御坊市湯川町小松原小字土居に所在し、館跡の大半は県立御坊商工高等学校・市立湯川中学校・湯川神社境内によって占められているのが現状である。また、小松原Ⅱ遺跡は湯川氏館跡に重複しつつ御坊駅から南東に広がる標高5m前後の自然堤防上に位置する。

遺跡が所在する自然堤防上には、縄文晩期の土器が出土した小松原Ⅰ遺跡（23）をはじめ、津井切遺跡（22）・蛭田坪遺跡（27）などが集中し、古く日高郡の郡衙が設置されたと推定されるところである。また、本遺跡は背後の丘陵上に所在する高地性集落・亀山遺跡（17）一や亀山古墳群（19）・鳳王寺山古墳群（14）・八幡山古墳群（20）・亀山城跡（18）などと関係深い位置にある。

2. 発掘調査の経過

湯川氏の館跡については、土居の小字が残り、館をめぐっていた堀の一部と考えられる池がみられる湯川神社付近が構えられた所と推定されていた。昭和54年度・同55年度に県立御坊商工高等学校の校舎改築に伴い県教育委員会によって試掘調査が実施され、室町時代頃と考えられる遺構・遺物が検出されたが、館跡と直接関係する遺構は確認されなかった。しかしながら、昭和55年度の市立湯川中学校の校舎改築に伴う調査、昭和56年度以降の県立御坊商工高等学校の校舎増改築に伴う調査において、館跡に関する室町時代の北堀・西堀（内堀・外堀）・土塁・杭列・池・溝・井戸な

表1 小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）における既往の調査一覧

	調査年月	調査の種類	面積	調査主体	担当	概要報告書名	発行	概要発行年月
1	53.7	県立御坊商工高等学校 校舎改築工事に伴う予備調査	18m ²	県教育会	松田 正昭			
2	55.6~55.7	試掘調査	130m ²	+	+	「御坊商工高等学校附属 文化財試掘調査報告」	県教育会	1981.3
3	55.7~55.8	縄文時代御坊駅前支店の建設に 伴う調査	210m ²	御坊市 湯川氏館跡調査会	久貝 健	「1980年度 湯川氏館跡発掘調査報告」	御坊市連 絡調査会	1981.3
4	55.12~56.1	市立湯川中学校特別教室改築工 事に伴う調査	190m ²	+	西岡 敏	「」	+	+
5	56.7~56.9	県立御坊商工高等学校 校舎改築工事に伴う調査	430m ²	久貝 健		「湯川神社境内道路（湯川氏 館跡）発掘調査報告」		1982.3
6	57.7~57.8	格技場改築工事に伴う調査	350m ²	+	+	「」	+	1983.3
7	58.7 58.10	I II III 自転車蔵場建設に伴う調査 校舎改築工事に伴う調査 污水処理場の建設に伴う調査	135m ² 400m ² 165m ²	久貝 健 中村政右衛門	+	「」 「」 「」	+	1984.3
8	59.8 59.9	I II 自転車蔵場建設に伴う調査 227m ²		+	+	「小松原Ⅱ遺跡（湯川氏 館跡）発掘調査報告」	+	1985.3
	59.12	湯川氏館跡周辺の測量図作成						
9	60.4~60.8	県立御坊商工高等学校 校舎改築工事に伴う調査	763m ²	+	+	「」 「」	県教育会	1986.3
10	61.7 61.10	I II III 管理別教室棟建設に伴う調査 特別教室棟建設に伴う調査 体育器具庫建設に伴う調査	364m ² 234m ² 183m ²	和歌山県文化財研究会 土井 孝之	「本概報」		+	1987.3

どが検出され、館の規模が当初想定していたよりも西側へ広がり、その規模も南北約180m、東西約230mを有することが明らかとなってきた。また、度重なる調査に伴い、縄文時代から奈良時代、鎌倉時代の造構・遺物が多数検出されるに至り、湯川神社境内遺跡（湯川氏館跡）と小松原Ⅱ遺跡は重複する複合遺跡として認識されるようになった。

3. 発掘調査の位置と方法（図面一）

本年度も、県立御坊商工高等学校の校舎増改築に伴い、昭和58年度調査Ⅱ区に連続する南側（1986年度調査第Ⅰ区を略して86-Ⅰ区と呼称する。以下同じ）、昭和60年度調査の西半に連続する南側（86-Ⅱ区）、昭和55年度の市立湯川中学校の調査区に隣接する南西側（86-Ⅲ区）の計3地区の調査を実施した。各地区の基準線は原点0・0からの距離を表示し、軸線は磁北に沿う。

4. 各地区の調査

86-Ⅰ区・86-Ⅱ区の調査は、特別教室棟・管理特別教室棟建設予定地を含め、各々86-Ⅰ区は393m²を対象とし364m²について調査、86-Ⅱ区は252m²を対象とし234m²について調査を実施した。86-Ⅲ区は体育器具庫建設予定地を含め204m²を対象とし183m²について調査を実施した。尚、調査の都合上、86-Ⅰ区の堀跡、86-Ⅱ区の自然流路の大半は機械掘削を実施した。

（1）86-Ⅰ区

検出遺構（図面二・図面七・図版一・図版二）

当地区の検出遺構は、同一方向に延びる弥生時代中期の溝4条、弥生時代の溝に重複する古墳時代前期の溝1条、館跡に関係する堀、溝1条、井戸3基などがある。

弥生時代 弥生時代の造構は溝に限られる。溝は4条あって各々、南東から北西方向へ延び、溝SD05と溝SD06が平行し、溝SD04と溝SD07がほぼ平行して延びる。溝SD05の掘り方は、ほぼ垂直に近い状態でUの形に掘削され、幅0.6m・深さ0.56m・延長16.0mを測る。溝SD06は浅い凹み状の溝で、幅2.2m・深さ0.32m・延長22.0mを測る。溝SD04は断面U字形に掘削され、幅0.8m・深さ0.32m・延長4.8mを測る。溝SD07も断面U字形を呈し、幅0.3m・深さ0.15m・延長0.7m以上を測る。いずれの溝も遺物は極めて少量で、第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式古段階の弥生土器が出土した。また、溝SD06から緑色片岩を石材とする石庵丁（160）が出土した。

古墳時代 古墳時代の造構は、弥生時代の溝SD06に重複する溝のみで、南東から北西へ延び、幅1.7m・深さ0.32m・延長22.0mを測る。遺物は、在地産の布留式甕2点が出土したに過ぎない。

室町時代 室町時代の造構は、大半が湯川氏館跡に関係するものと考えられ、堀の一部、溝1条、石組み井戸・木棒井戸・素掘り井戸各1基などがある。堀は、幅8.3m・深さ2.1m・延長20.0m以上を測り、3段構造に掘削されている。但し、明確なコーナーを検出していないが、土層ペルトを境にして東側につれ浅くなること、埋土の堆積状況などから確実に堀のコーナーと判断できるものである。埋土は、礫・粘質土・砂が幾層も複雑に堆積している。堀に関連した遺物としては、土師

器碗(36~39)・皿(40~43)・土釜(48)・瓦、上層で白磁皿(70)・七角杯(71)などがあり、それ以前の遺物には瓦器碗(45)・瓦器小皿(46)・土師器小皿(44・47)・青磁碗(53・55・57)などがある。堀は、段掘り構造・規模などから前年度調査地区の内堀と類似し、連続するものと考えられる。

溝S D01は、堀・井戸S E02に切られる幅3.2m・深さ0.3m・延長8.6mを測る。堀に接する東肩付近が2段構造を呈し、北半では数ヶ所に径5cmの杭材が打ち込まれていた。

井戸は計3基あって、井戸S E01は割石と川原石を小口積みした石組み井戸で、掘り方径約2.5m・深さ約3.8mを測る。石組みは径1.25mで井戸の基底部までほぼ垂直に続き、深さ2.0mから2.6mにかけて加工痕のある数枚の板石が埋没していた。遺物は板石より上から二次焼成を受けた多量の瓦類が出土、また板石より下の灰色粘泥からは遺存の良好な瓦類(142・143)が多量に出土し、これらに伴って白磁皿(64~66)・染付皿(67)・土師器皿(63)・鉄鎌(153)・曲物・木製品などが出土している。井戸S E02は、人為的な埋め戻しの認められる井戸である。井戸S E03は、板材を縦に差し込んだ木棒井戸で、掘り方径1.5m・深さ約1.85mを測る。井側は土圧により歪むが径1m前後で、縦板10枚を両側同志上下2段に木製楔で締ぎ合せ、角材4本で井側を支え固定している。井戸の下半より幅7cm・厚さ5mm・長さ70cm以内の板材が10枚程出土している。遺物は土師器皿(62)、掘り方より漆器碗(161)が出土した。

その他、調査区内では複雑に重複する土壠が多數掘削され、土砂と共に土器類・二次焼成を受けた多量の瓦類・焼土が投棄された状況で出土している。遺物等から江戸時代中頃までと考えられる。

出土遺物(図面九・図面十一)

瓦器碗(45)は器壁が厚く、腰が張る、窓磨きは施されず、外面下位に粗い指押えが残る。淡灰白色を呈し、炭素の吸着が不十分である。土師器小皿(44・47)・瓦器小皿(46)・白磁碗(57)は堀跡以前の所産である。土師器(36~43)は口縁部の立上がりの強い椀(36~39)・口縁部が緩やかに外傾する皿(40~42)、底部の境で肥厚する皿(43)に分れる。椀(36~39)は緻密な胎土で、堅硬な焼成である。土釜(48)は鶴の付かない類で、胎土は粗く片岩を含む。須恵質捏鉢(49)は淡灰白色を呈し、やや粗い胎土をもつ。青磁碗(55)の釉は透明度が強く発色の薄い青緑色を呈する。その他青磁(51~54・56・57)・白磁(64~66・70・71)・染付(58~60・67)がある。

(2) 86-II区

検出遺構(図面三・図版二・図版三)

当地区の検出遺構は、弥生時代を主体とする下面と鎌倉時代から室町時代を主体とする上面に二分される。下面遺構は自然流路と溝1条、上面遺構は溝3条、足跡、Pit、堀、土壠がある。

縄文時代~弥生時代 自然流路は、幅12m・深さ3.4m・延長17.3mを測る。各堆積層は安定した堆積を示し、自然堆積と考えられ前年度調査区の低地に連続するものである。機械掘削のため見るべき遺物もないが、前年度と合せれば幅員24m前後を測り、堆積層もほぼ対応する。自然流路の西肩に沿って溝S D 8が掘削されている。溝S D 8は、幅1.2m・深さ0.6m・延長16.5mを測り遺

物は皆無であった。堆積層との対応からみれば、弥生時代中期後半を前後する時期と考えられる。

鎌倉時代 鎌倉時代の遺構には溝SD3と足跡がある。溝SD3は南東から北西に延びる幅3.5m・深さ1.0m・延長11.0mを測る二段構造の溝で、北半に別の遺構の存在が考えられたが、東側の段は全て溝SD03に伴うものである。溝SD3の南半（段が浅くなる地点）には、溝に直交する方向に2列の杭列で構築された井堰が検出され、井堰の南側では多量の木屑・自然木・礫などの堆積が認められた。遺物は瓦器椀（33）・土釜（29）・土師器皿（22～28）・小皿（30・31）・白磁碗（34・35）・銅錢（149）・獸骨（牛）などがある。南半の浅い段の東側には溝SD3を意識して方向の乱れた足跡が集中している。溝SD6・溝SD7・Pitは、溝SD3の切り込む第12層・第13層除去面において検出した遺構で、遺物は皆無である。

室町時代 室町時代の遺構には堀、土塁がある。堀は土塁を境にして外堀と内堀に区別でき、内堀は幅0.4m・深さ0.4m・延長4.5mを、外堀は幅5.0m・深さ1.1m・延長15.0mを、土塁は幅1.6m・高さ0.3m・延長4.5mを検出したにとどまる。その内外堀は、調査区南端で東に折れ曲がり、再び南に折れ曲がる。また、調査区南壁の土層観察によれば、南北方向に直線的に延びる古い段階の外堀が確認された。これらの遺構は、前年度調査の外堀・土塁・内堀に連続するものである。遺物は土師器・陶磁器・木製品（浮子・箸）・自然遺物・銅錢（151）・瓦などが少量出土した。

出土遺物（図面八・図面九）

包含層からは奈良時代の須恵器・土師器・瓦など比較的多くの遺物が出土し、須恵器杯蓋（11・12）・壺（13）がある。溝SD3の土師器（22～28）は口縁部が内寄する（23）と外傾する（22・24～28）がある。皿（23）の胎土は緻密で若干の小砂粒を含む。淡黃白色を呈し白色系土器に類似する。皿（24）は淡茶桃色を呈する。土釜（29）は鋸より上位の部分が遺在しており、外面は指押えと撫でにより仕上げられる。胎土は粗く片岩は含まれない。瓦器椀（33）は幅の広い籠磨きが施され、暗文の形状は不明。北宋錢（149）は铸造1107年の大觀通宝で土器の時期に符合する。

（3）86-Ⅲ区

検出遺構（図面四～図面七・図版三・図版四）

当地区的検出遺構は、弥生時代の土壙5基、奈良時代の土壙2基、室町時代の土壙数基、溝2条、井戸1基、その他整地土壙などがある。今年度の調査では最もまとまりの認められる地区である。

弥生時代 弥生時代の遺構は土壙に限られる。土壙SK009は長軸3.2m・短軸0.85m・深さ0.4mを測り、舟底形を呈する土壙である。遺物は上・下2層に区別でき、上層は第1層から第5層に、下層は第6層から第11層にレンズ状に堆積し、大型品なども破損した状況で出土した。遺物は、第Ⅲ様式最新相段階に位置付けられる壺（1～3）・甕（4～6）・高杯（9・10）・台付鉢（7）があり、摩滅の著しい遺存度の悪い弥生土器である。その他、サヌカイト製の石鎌（157・158）・剣片1点、石皿が出土している。土壙SK010は、長軸2.3m・短軸0.6m・深さ0.35mを測り、隅丸長方形を呈する土壙である。壁の立ち上がりは若干外方に広がり、基底部はほぼ平坦である。土層観察により、壁面、基底部に沿って厚さ4cmの粘質土を充填していることが確認できた。遺物は少なく、

甕口縁部・底部が各1点ずつ出土している。その他、土壙SK007・SK016・SK022・SK010南側のPitなどからも前後する時期の弥生土器が出土し、SK022からはサヌカイト製の石錐1点(159)も出土している。

奈良時代 奈良時代の遺構は、土壙2基のみである。土壙SK012は、南北1.9m・東西0.6m・深さ0.5mを測り、西半は調査区外に延びる。遺物は土師器甕(14~16)などが出土した。

室町時代 室町時代の遺構は、湯川氏の館跡に直接関係すると考えられるものである。土壙SK008は、南北2.2m・東西2.0m・深さ1.1mを測り、楕円形を呈する土壙で東半は調査区外に延びる。遺物は、下部の灰色粘泥層から土師器大皿(125・126)・中皿(115~121・127~130)・小皿(122~124・131)が300点近く、平瓦片と共に出土している。覆土の状況から人為的な埋め戻しが考えられる。土壙SK021は、長軸1.35m・短軸0.95m・深さ1.15mを測り、隅丸長方形を呈する土壙である。遺物は、第5層の灰色粘泥層に集中し多量の藁・木っ葉などと共に土師器碗(72~85)90点・小椀1点(86)・曲物などが出土している。覆土・遺物の出土状況などから、投棄したのではなく藁などの間に土器を置いていたと考えられる。その他、土壙SK001-a・b・SK013・SK014・SK020などから合前後する時期の遺物が出土している。

溝SD001は、新・旧の認められる溝である。古い溝は、幅5.1~6.0m・深さ0.8~0.7m・延長6.0mを測り、西端両肩で各々外側へ突出する掘り込みが確認された。遺物は南肩中層に集中し、土師器皿類が多量に出土している。新しい溝は、幅4.0~4.3m・深さ1.0m・延長6.0mを測り、下部中央には幅0.2m・深さ0.06m・延長3.4mの小溝が延びる。遺物は下部の灰色粘泥層に多く、土師器皿(87~96・104~106)・小皿(97~103・111)・瓦質甕(114)・白磁合子(113)・曲物・漆器碗・木箸・歯骨・種などがある。溝SD001は、昭和58年度調査II区の溝4に統くものと考えられる。

井戸SE001は、上部円形、下部方形の石組み井戸である。掘り方は径3.1m・深さ2.1mを測り、石組みは上部で径1.5m・下部で一辺1.45~1.5mを測る。石組みの下部には砂層に接して、直径25cm前後の胴木が南北を下に東西を上に井桁に組まれている。石組み下部の構築順は、井桁に組んだ胴木の四隅に大きめの割石を据え、各辺の中央に小さめの割石を1個ないし2個据えつつ、丸みのある川原石を詰め順次上へと積み上げている。井戸の上部には多量の石材が落ち込んでおり、少なくとも石積みは50cm程度陥落しているものと考えられる。遺物は上部で二次焼成を被けた多量の瓦類に混じって、備前焼甕・壺・五輪塔の地輪・茶臼が、下部では良好な瓦類・金縫絵の漆器碗・木製品などが出土している。特に、上部からではあるが、「天正四年 子丙 六月□」と菟籠書きされた平瓦片(148)が出土したことは注目される。

出土遺物(図面八・図面十・図面十一)

土壙SK009出土の弥生土器は、形態・胎土中の砂粒の構成・色調などの差異により器種分類を行なった。点数は口縁部の数を基本としたが底部・脚台部の合計数にも比較的対応している。器種構成は広口壺6点(把手付壺1を含む)・貼付突帯の付加される直口壺7点・細頸壺大形3点・小形3点・甕大形6点・中形3点・小形13点・脚台付鉢小形1点・大形2点・脚台付複合鉢1点・高杯8

点、蓋1点の計54個体を数える。文様は梯擗文を主体に、梯擗直線文・波状文・簾状文・籠刻み目文、円型貼付符文、凹線文がある。従来の第Ⅲ様式最新相と考えられる好資料である。

土壌SK021出土の土師器には、A類（楕39点・24分割の口縁部計測法による個体数11.7個体）、B類（楕49点・17.5個体）、C類（楕2点・0.8個体）、D類（小楕1点・1個体）、小皿・土釜・須恵質捏鉢各1点がある。径高指數の平均値はA・B類が32.7、C類が29.1である。

溝SD001出土の土師器にはA類（皿216点・23.5個体）、B類（小皿46点・12.5個体）、C類（皿9点・2.6個体）、D類（皿3点・1.9個体）、E類（楕6点・1.4個体）、F類（小皿1点・0.5個体）、G類（小皿3点・0.3個体）、土釜2点、瓦質甕1点、備前焼甕3点、白磁1点がある。径高指數の平均値はA類24.7、B類28.3、C類25.9、D類20.8、E類28.7、F類22.5、G類22.5、H類22.9となる。

土壌SK008出土の土師器にはA類（中皿134点・23.1個体）、B類（小皿27点・8.5個体）、C類（大皿7点・1.4個体）、D類（中皿110点・12.7個体）、E類（中皿1点・0.8個体）、F類（中皿1点・0.1個体）、G類（中皿2点・0.2個体）、H類（小皿8点・0.6個体）、陶磁器には美濃瀬戸天目碗1点、灰釉壺1点、青磁1点、白磁1点、染付1点、備前焼甕3点、擂り鉢2点がある。径高指數の平均値はA類23.2、B類23.4、C類16.4、D類19.5、E類23.5、F類22.1となる。

法量の変化は第2～4表で見るように漸次縮少・分化する傾向にあり、土壌SK021を14世紀の第4四半期、溝SD001を15世紀の第2四半期ないし第3四半期、土壌SK008を15世紀の第4四半期ないし16世紀初頭に位置付けられる。

5. ま と め

本年度の調査では、小範囲でありながらも各地区の調査で重要な成果を得ることができた。

弥生時代の遺構では、86-I区・86-II区において旧自然堤防上の縁辺に沿って流れる自然流路と方向を同じくして多条の溝が掘削される。86-III区において微高地中心に近づくにつれ、高位置に生活遺構に関係する土壌などが検出されている。古来、日高川の流路に規制されながら集落の占地を求める様は、小松原II遺跡のみならず小松原I遺跡・富安I遺跡(21)・津井切遺跡(22)・東方約1.4kmに所在する東郷遺跡(29)などの集落と方形周溝墓・土壌墓の検出された蛭田坪遺跡・富安I遺跡の墓域を含めた生活空間を考える上で重要な位置を占めるものである。

奈良時代の遺構・遺物も86-III区まで広がりが確認され、86-II区の遺物包含層にもこの時期の遺物が多く出土している。今後、遺構の性格をも含めた上で検討される必要がある。

湯川氏の館跡に関して、86-I区では従来、考えられていなかった位置に東西方向の堀が確認され、86-II区では前年度調査区に統く外堀・土塁・内堀が確認された。このことによって、当初考えられていたような単純な区画ではなく、外堀・内堀共に86-II区付近において北から南へ延びてきた堀が、大きく東へ方向を変え、更に86-I区において再び南へ方向を変えることが推測できるものである。また、内回りの区画も、86-III区で検出した溝SD001に連続するものとして、昭和58

年度Ⅱ区の溝4、86—I区のSD01を考えることができる。86—I区では溝SD01を境として、東側の地山が約30cm高くなっている。江戸時代までに整地された際の土壌が昭和58年度Ⅱ区溝4より東側、同Ⅲ区、86—I区溝SD01より南側に密集し、館の建物に重複した地点であることを窺わせている。井戸・土壌なども遺物と共に湯川氏に関する重要な資料である。

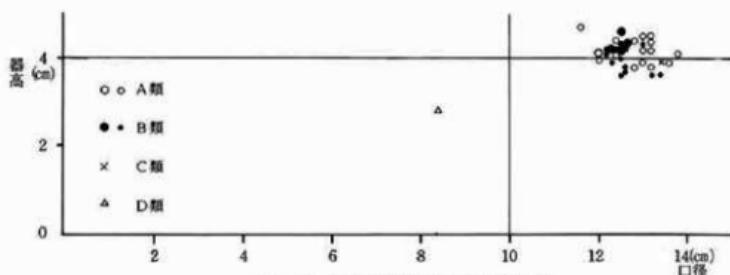


表2 86—I区SK021出土土師器 法量分布

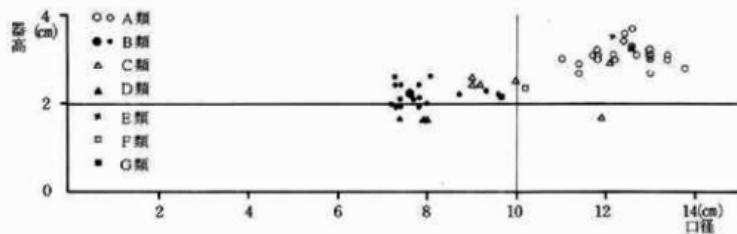


表3 86—I区SD001出土土師器 法量分布

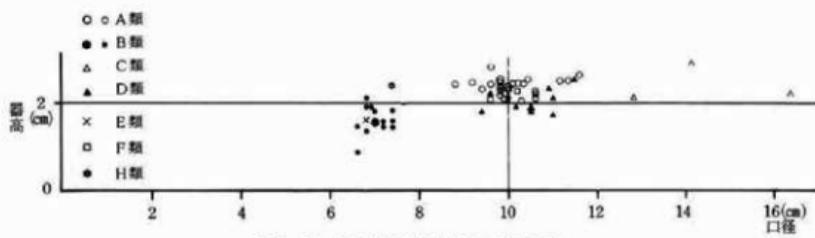
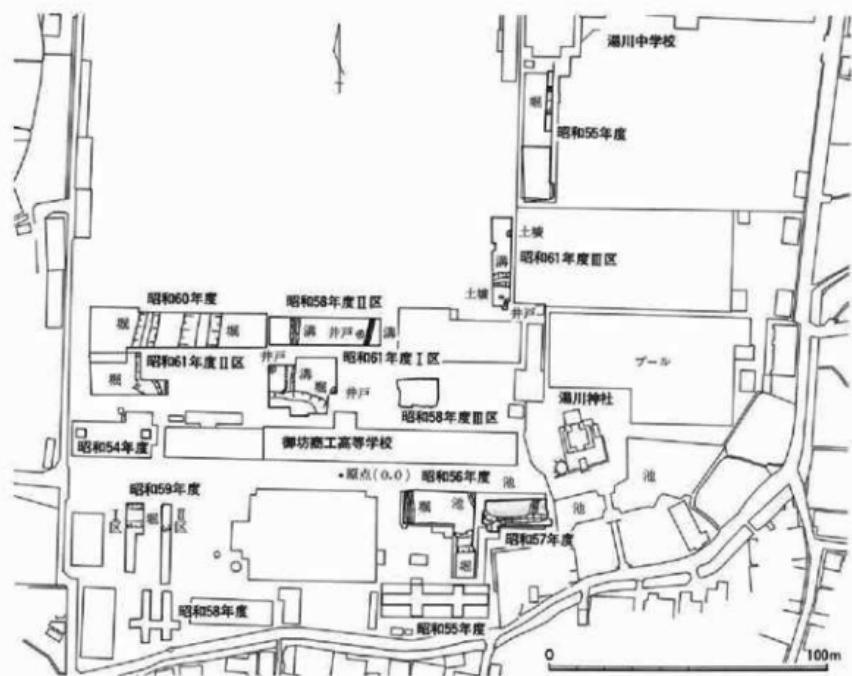


表4 86—I区SK008出土土師器 法量分布

図面一 小松原II遺跡と調査地区位置図



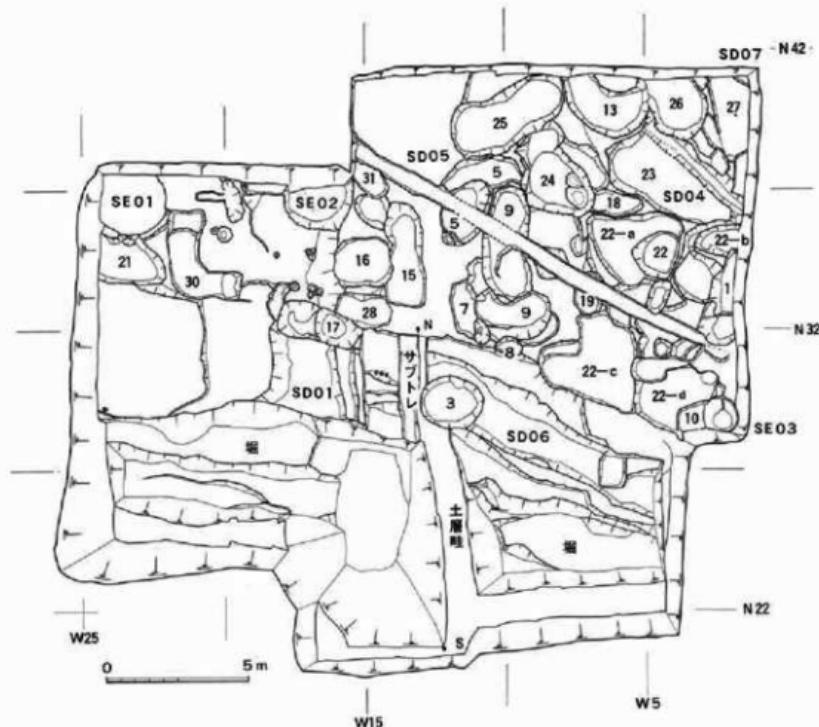
小松原II遺跡とその周辺



調査地区位置図

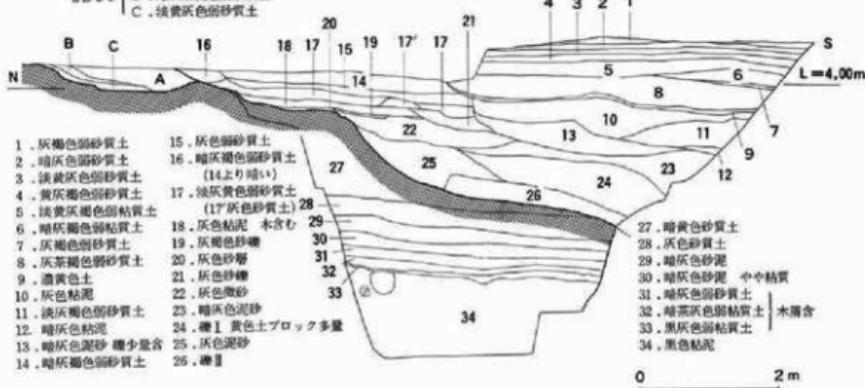
(湯川氏館跡に関する造構)

図面二 検出遺構

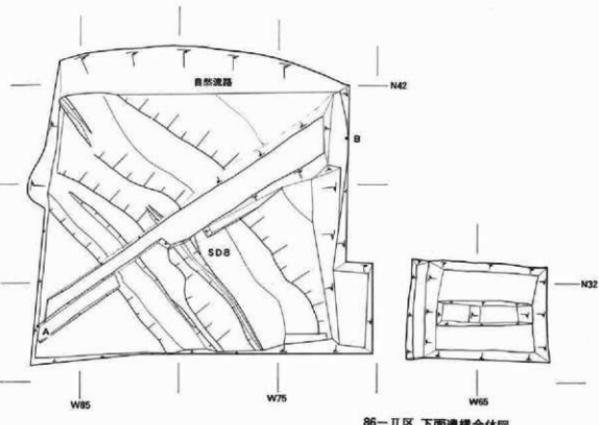
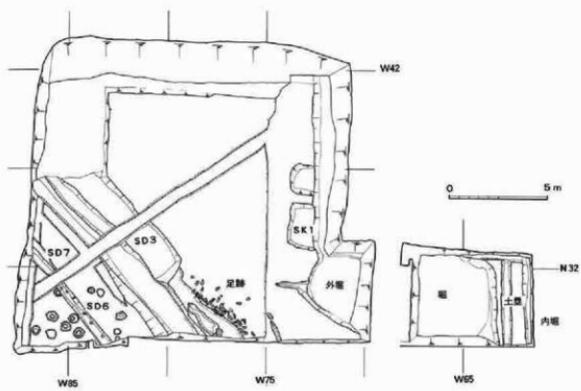


86-I 区 遺構全体図

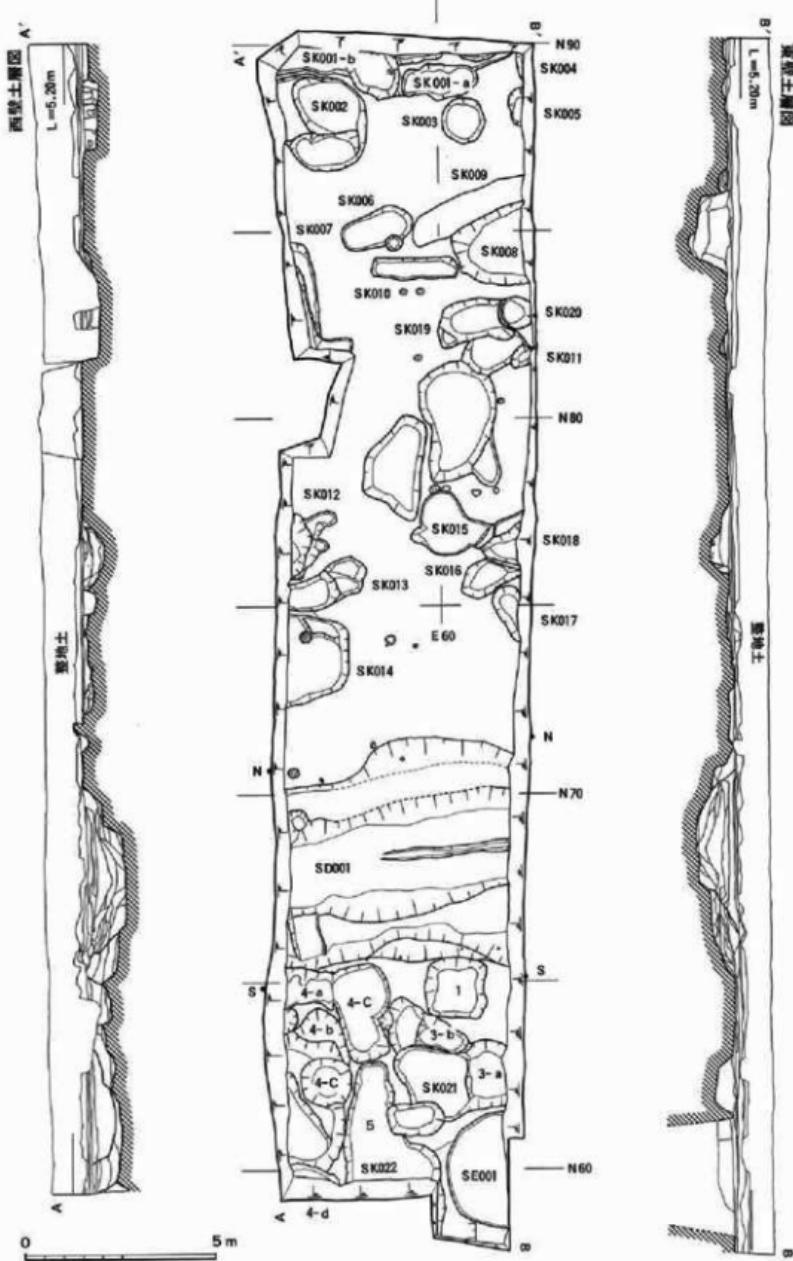
SD06 | A. 暗灰褐色細砂質土
B. 暗灰茶褐色細砂質土
C. 淡黄褐色細砂質土



堀跡断面土層図

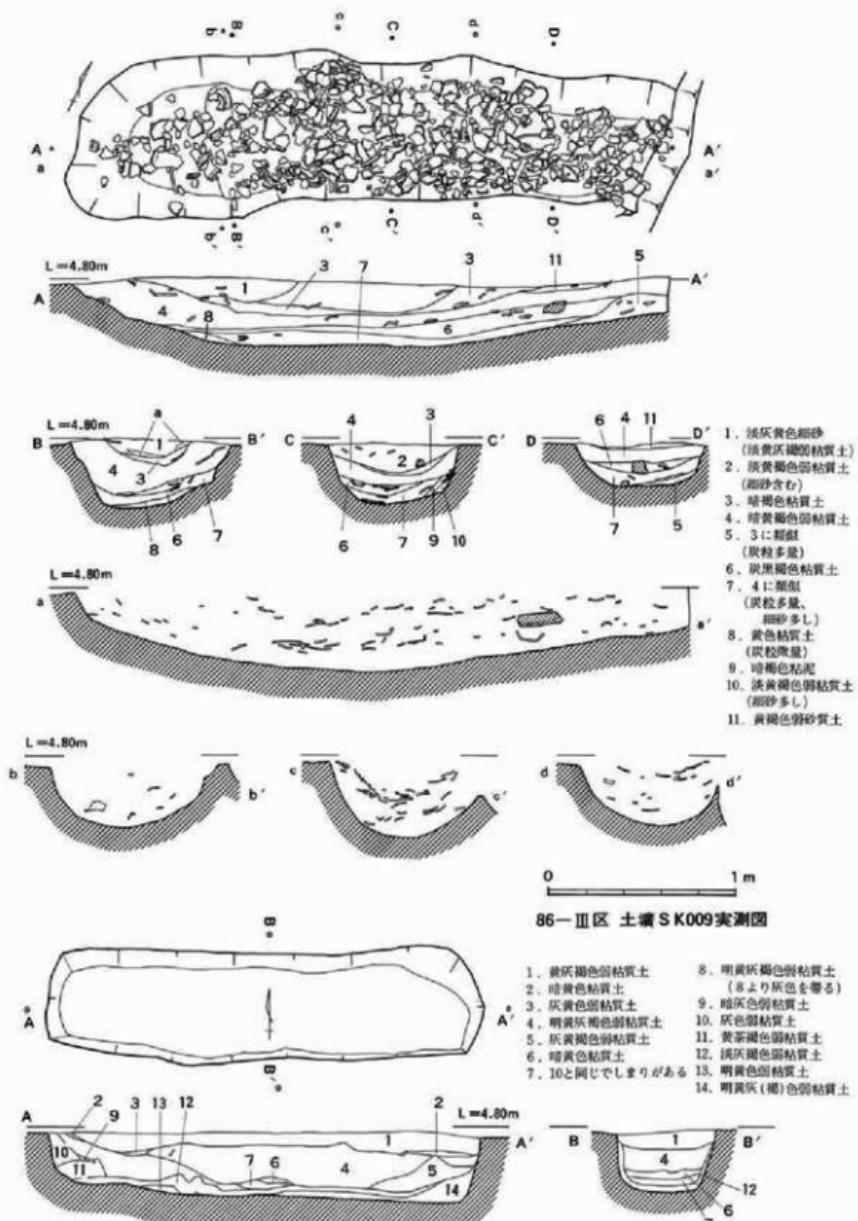


四面検出構造



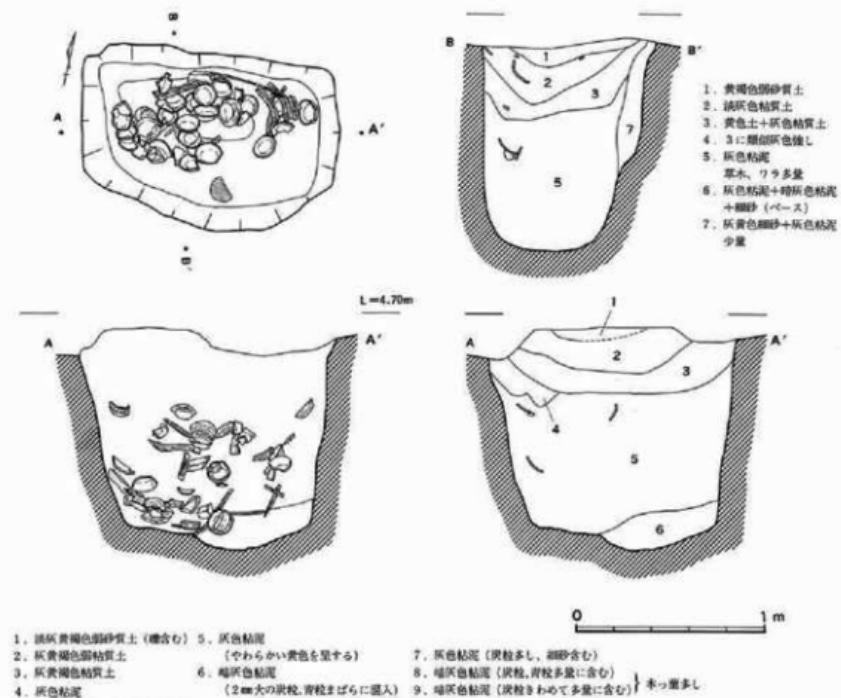
86-Ⅲ区造構全体図

図面五 検出遺構

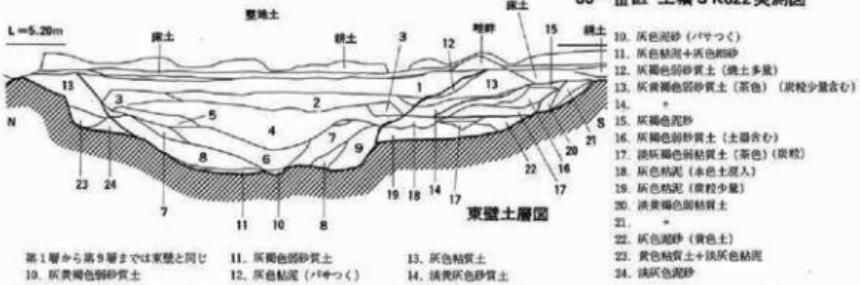


86-III区 土壌SK010実測図

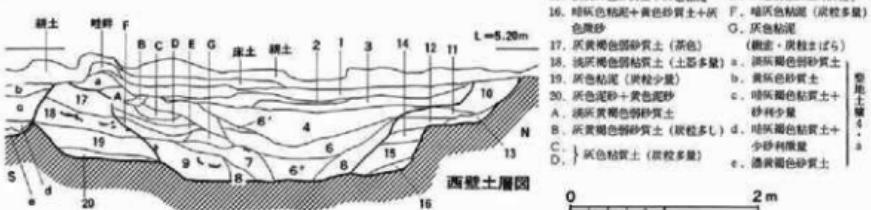
図面六 検出遺構



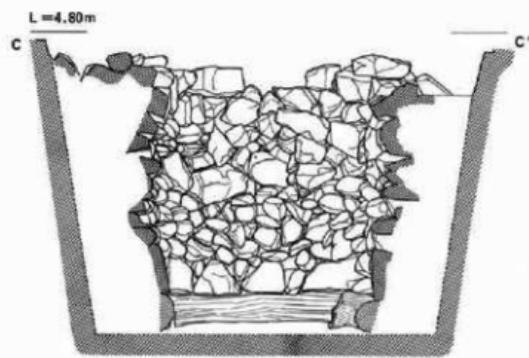
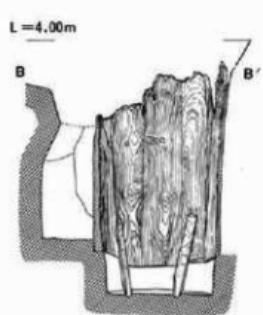
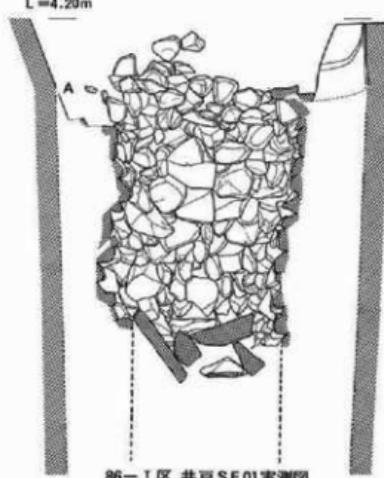
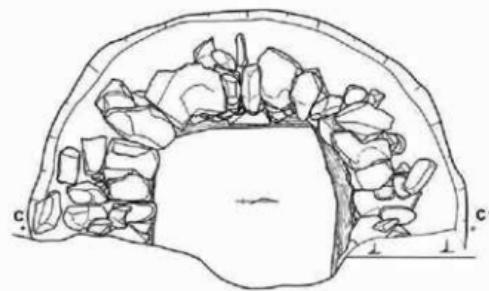
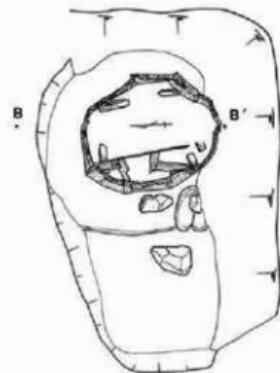
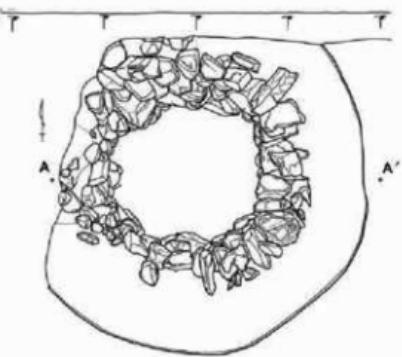
86-Ⅲ区 土壌 S K022 実測図



第1層から第9層までは東壁と同じ
10. 灰褐色細砂質土
11. 灰褐色細砂質土
12. 灰色粘泥 (パサつく)



86-Ⅲ区 溝 S D001 土層図



86-I区 井戸SE01実測図

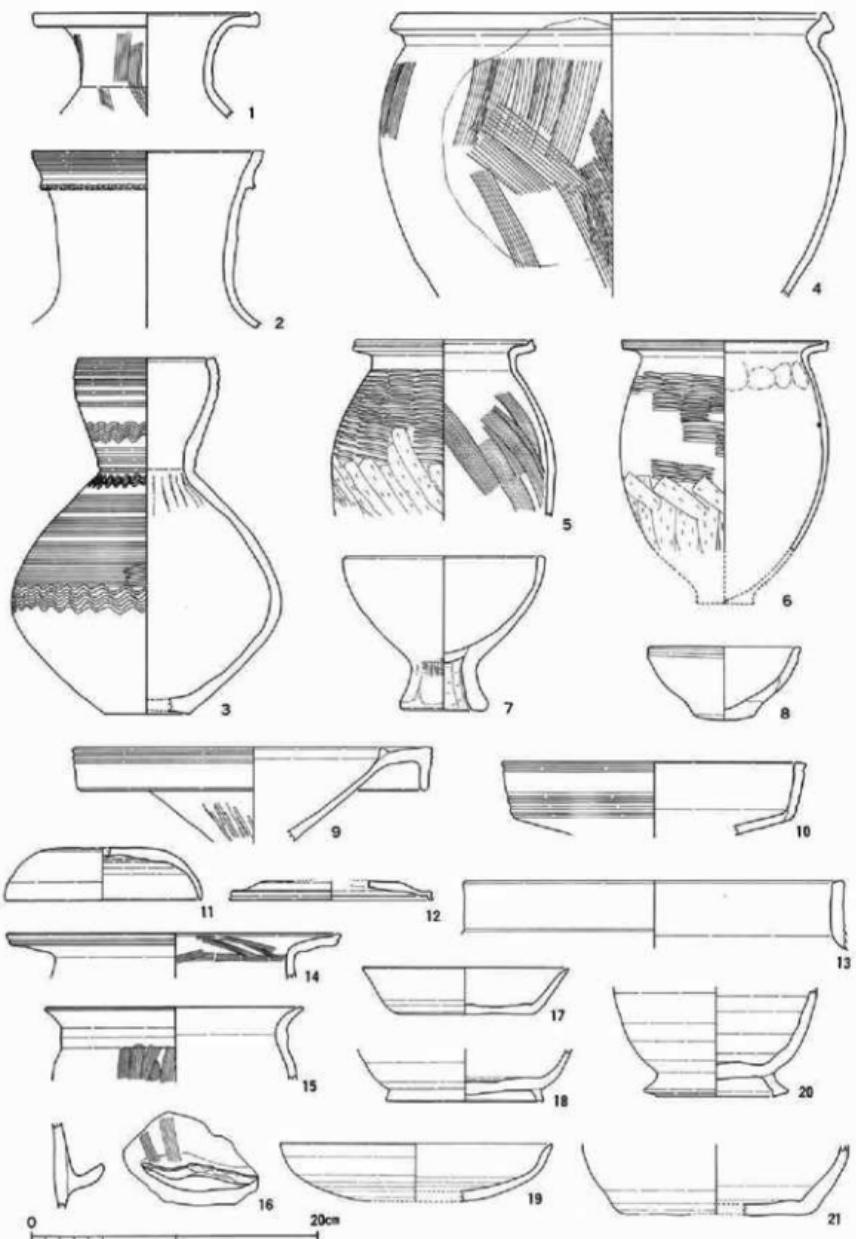
86-I区 井戸SE03実測図

0 1m

86-I区 井戸SE01実測図

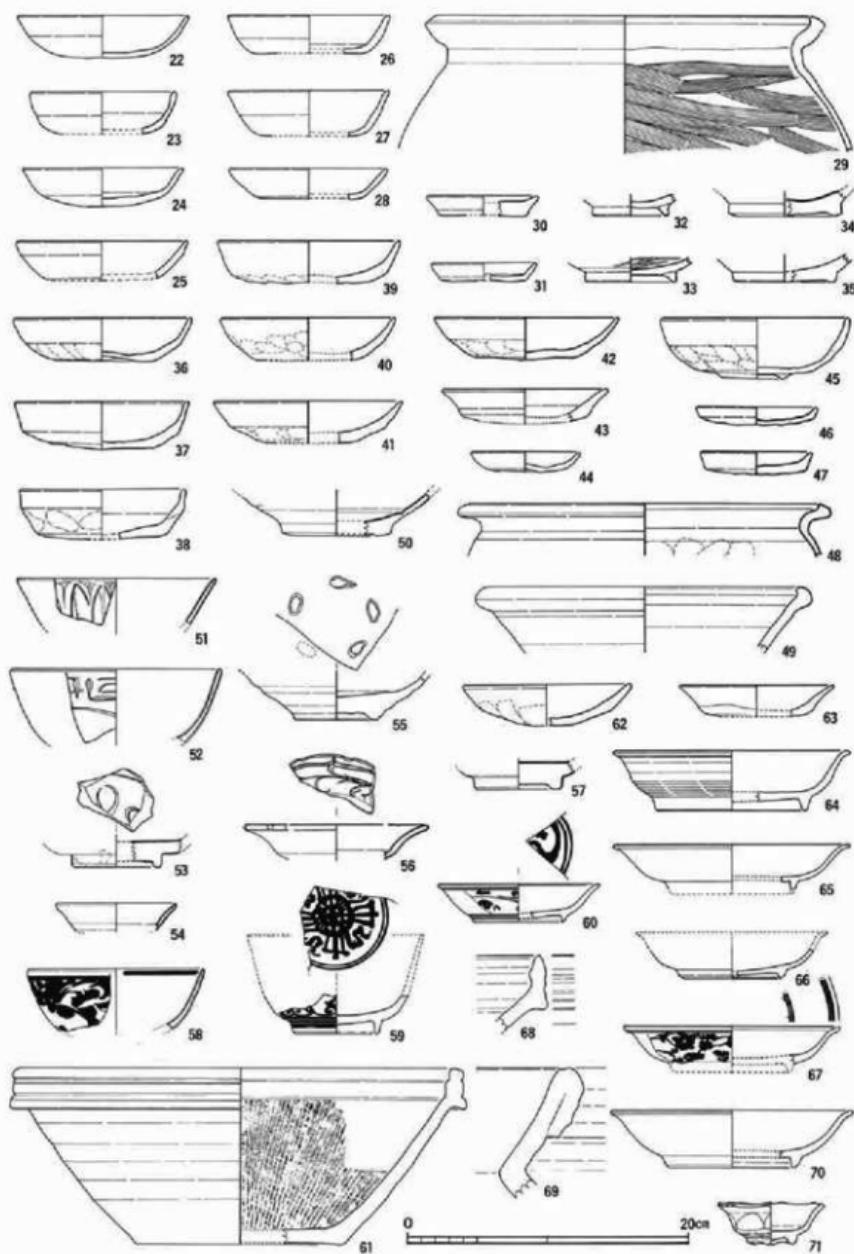
著者: 佐藤一郎

図面八 出土遺物



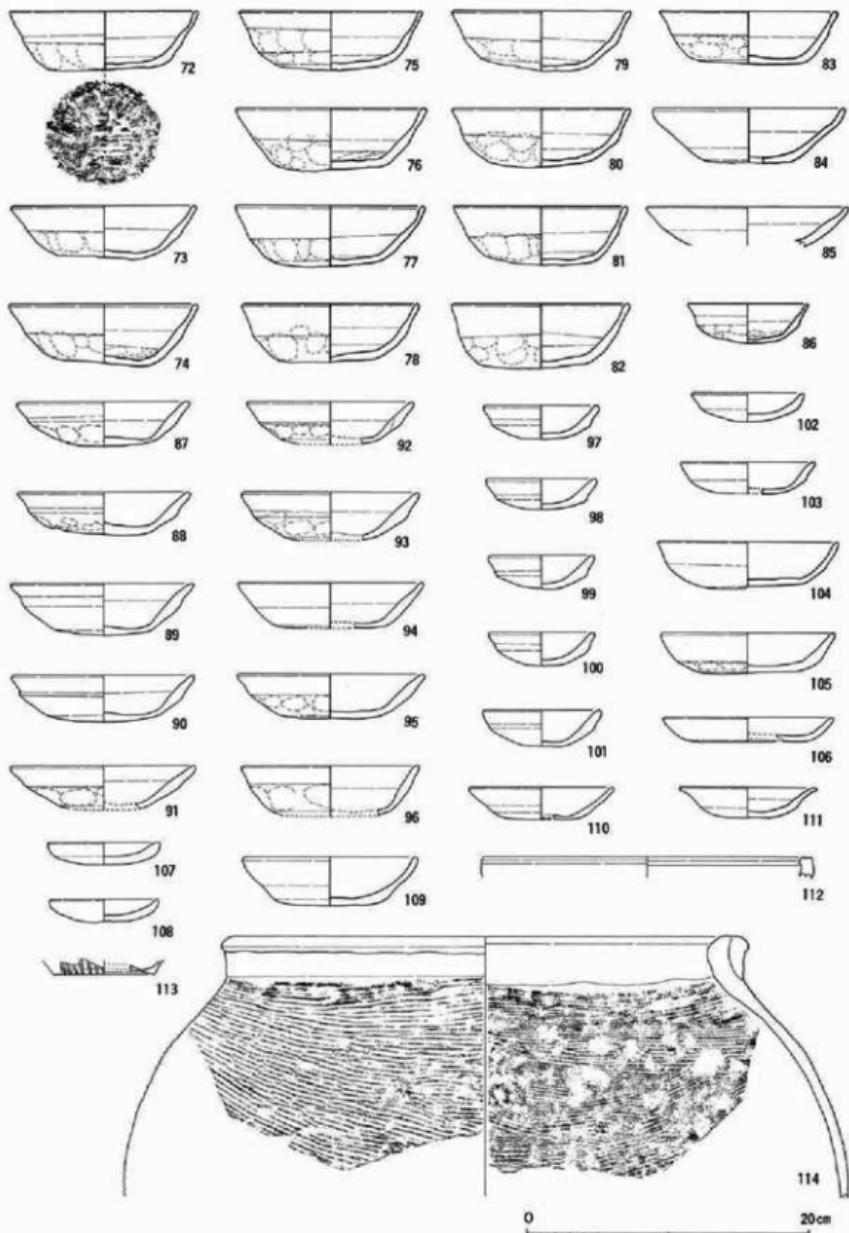
86-Ⅲ区 土壌SK009(1~7・9・10), 同土壌SK016(8), 86-II区 瓦路上層(11~13),
86-Ⅲ区 土壌SK012(14~16), 同土壌SK019(17~21)

図面九 出土遺物



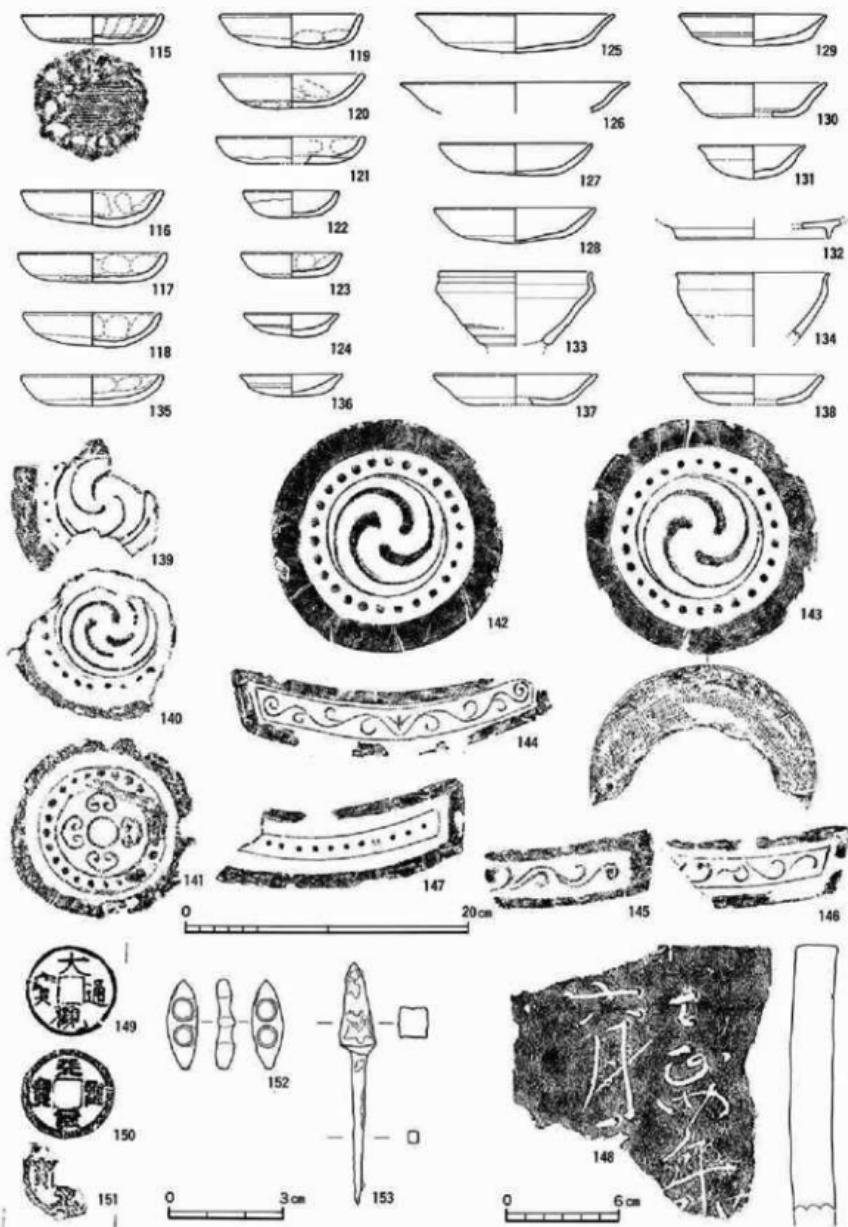
86—II区 満SD3第5層(22—27・29—34), 同溝SD3第3層(28・35), 86—I区 磁路(36—47・55・57), 同磁路北段(48・49・53), 同井戸SE01(63—68), 上層(69) 同井戸SE03(62), 同溝SD02(70・71), 同整地土壤10(58), 同整地土壤16(60), 同整地土壤20(51), 同整地土壤22B(56), 同整地土壤23(59・61), 同整地土壤25(54)

圖面十 出土遺物



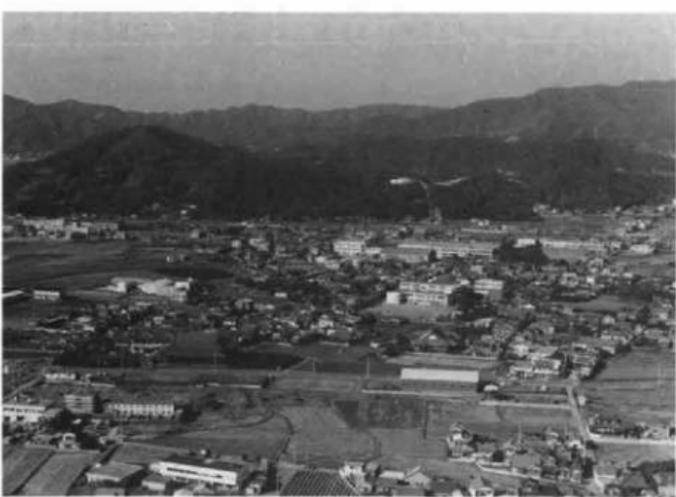
86—Ⅲ区土壤 SK021(72~86) A類(72~77) B類(78~83) C類(84~85) D類(86) 同溝 SD001
(87~114) A類(87~96) B類(97~103) C類(104~106) D類(107~108) E類(109) F類(110) G類(111)

図面十一 出土遺物



86-III区土壤 SK008 (115~133) A類(115~121) B類(122・123) C類(125・126) D類(127・128) E類(124)
 F類(129) G類(130) H類(131) 同土壤 SK013(135~138) 同 S.E001(148) 86-I区井戸 S.E01(142・143・153)、
 同整地土壤4(144・147) 同整地土壤10(150) 同整地土壤13(152) 同整地土壤22(140・141) 同整地土壤24(145
 ・146) 同整地土壤27(139) 86-II区廻跡上層(151) 同溝 SD3 第5層(149)

図版一 遺跡遠景・検出遺構



遺跡遠景
(南より)



86-I区全景
(北より)



86-I区
井戸SE01
(東より)

図版二 検出遺構

左.

86—I区
井戸SE03
(西より)



右.

86—I区
井戸SE03
掘り方漆器
撿出土状況
(西より)



86-II区
下面全景
(北西より)



86-II区

A-B
セクション土層
(南東より)

図版三 検出遺構

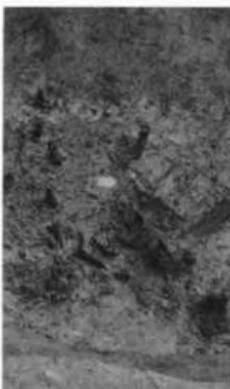
86-II区
上面全景
(北より)



86-II区
溝SD3遺物出土
状況(北西より)



左上.
86-II区
溝SD3杭列検出
状況(北東より)



左下.
86-II区
溝SD3獸骨出土
状況
(南西より)



右.
86-III区全景
(北より)



図版四 検出遺構

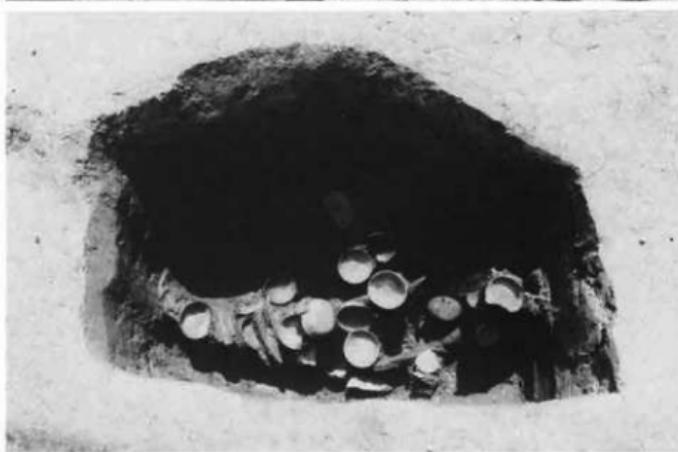
86—Ⅲ区
土壤 SK009
遺物出土状況
(北西より)



86—Ⅲ区
土壤 SK010
(北より)



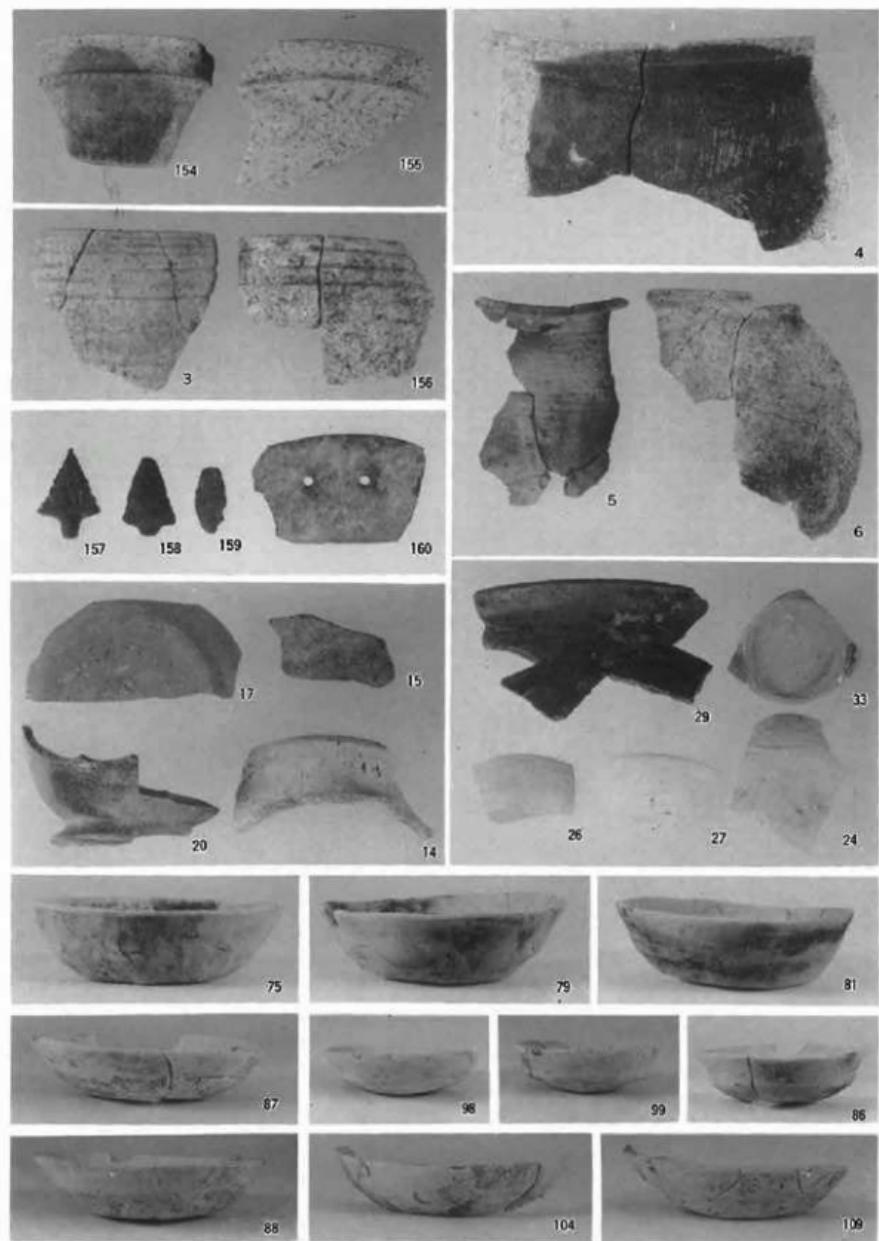
86—Ⅲ区
土壤 SK021
遺物出土状況
(北より)



86—Ⅲ区
井戸 SE001
(西より)

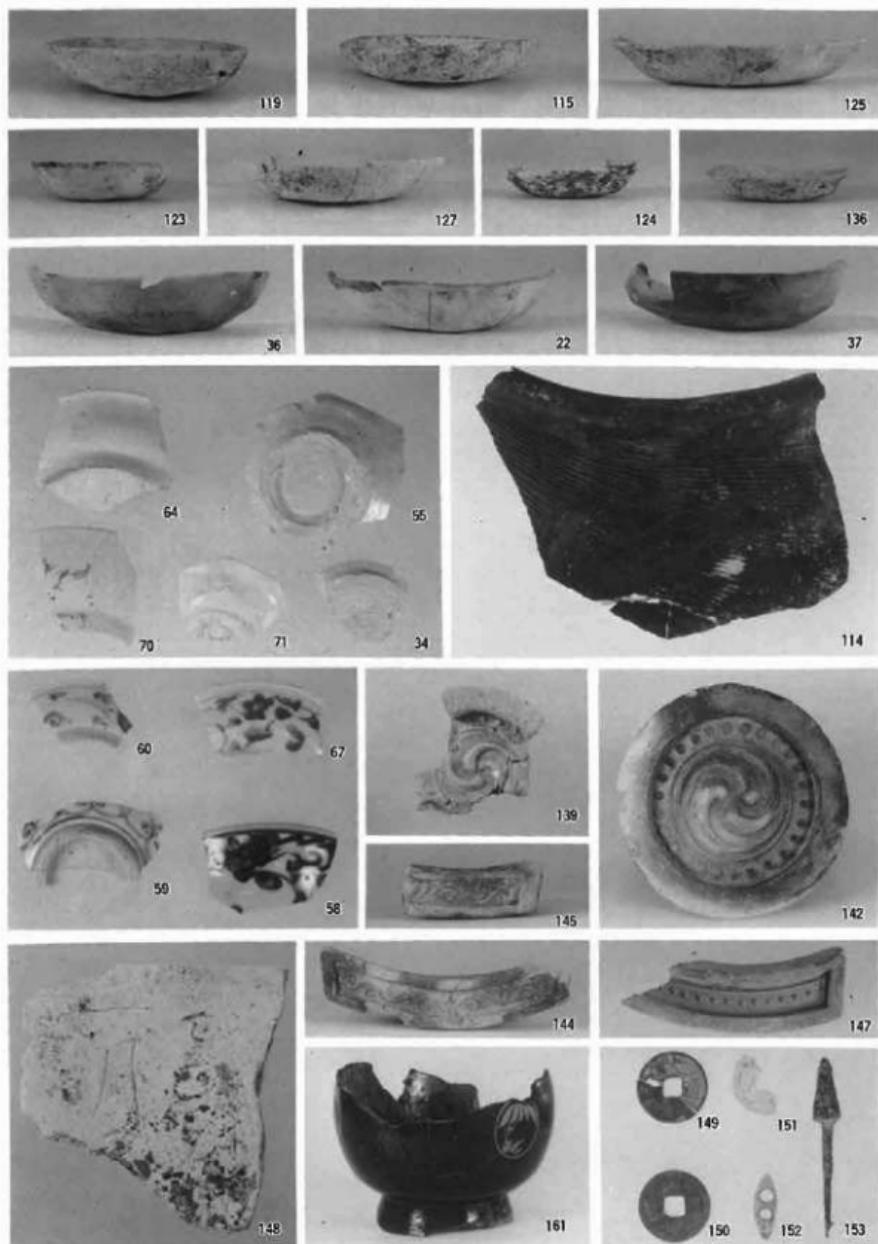


圖版五
出土
遺物



86—I区 溝SD06(160)、86—III区土壤SK009(154~158)、同土壤SK022(159)

図版六 出土遺物



昭和62年3月14日 発行

県立御坊商工高等学校

埋蔵文化財発掘調査

一小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)の調査一

発行 和歌山県教育委員会

印刷 邦上印刷